

書評

田中克彦 『「スターリン言語学」精読』

岩波書店（岩波現代文庫 G8）、2000 年、293 頁。
本体価格 1000 円。ISBN 4-00-600008-1.

小林 潔

0: 書評対象

2000 年 1 月より岩波書店は「岩波現代文庫」の刊行を始めた。「戦後日本人の知的自叙伝ともいうべき書物群であり」、「広範な分野のすぐれた成果の蓄積」を「厳選して収録」したシリーズである¹。ここには「成果の蓄積」たる既存書籍の文庫化の他、書き下ろしも同時に収められている。本書は、その書き下ろしの一つであり、「学術」「文芸」「社会」の 3 グループのうち「学術」に属するものである。

著者である田中克彦はモンゴル学者・言語学者。スターリン言語学及びマル主義²に関して、既に何度か発言を繰り返してきた。本書「あとがき」によれば、彼は、言語学に関するスターリンの発言をきっかけに、この学問領域に踏み入ったという。

そして、田中のこのような経歴に「うすうす気がついてきた」かつ恐らくは田中のこれまでの著作に通じていた岩波編集者によって執筆が提案され、1 月半で執筆したものが本書であるとのことである (291-293)³。「妖怪スターリンの言語、民族理論の再評価を試みる言語学者

¹ 「岩波現代文庫の発足に際して」。

² 田中は「マル主義」と表記している。

³ 「あとがき」。() 内に頁数を示す。ここでは、田中克彦『「スターリン言語学」精読』（岩波書店、2000 年）即ち書評対象の頁数である。以下、同じ。

の危険な挑戦」というのが出版社側の紹介文である¹。

田中自身は、「スターリン論文を、おそらくこれを最後に、読者に提供する好機になるかもしれないと考えて」（292）執筆にとりかかる。自身、認めているように「本当ならもっとていねいに書き込んでおくべき多くのことがもれている」（292）。勿論、著者が言うように今までの著作から補うことはある程度可能であるが、本書の叙述が不十分であることは否めないし残念である。

本稿では、本書の内容を紹介し、幾つかの領域での反映を瞥見し、本来、記述されていたであろう書誌データを補うことで、書評としたい。

0-1:本書の目的と内容

本書は、スターリン Сталин И.В. (1879—1953) が1950年に行った言語学関係の発言（著作）、即ち「スターリン言語学」に関して、スターリンのそれまでの民族・言語論と関連させて捉え、

- 1: 「どのような歴史のコンテキストの中で発せられたか」（3）を示し、
 - 2: 「思想的、学問的系譜」（4）を追い、
 - 3: 「同時代の正統的、アカデミックな潮流の中においてみて、それらと対比しながら論じるという試み」（4）を行う、
- というものである。この方法の結果は、「すくなくとも一九世紀から二〇世紀にかけての言語思想の世界的な流れの一部をなすもの」（4—5）であり、「スターリンを通して語られた、一九世紀から二〇世紀言語学のコンテキストからみた、ソビエト・イデオロギーについて述べることに」（5）なるのである。そして「スターリン言語学」の意味を明らかにしようという。

このような目的に基づいて、本書は大きく3つに分かれる。

第1部は、「第一章 『民族』の定義の構造」、「第二章 一九二〇年代のスターリン」、「第三章 一九五〇年—マルクス主義と言語学の諸問題」であって、本書の目的に答えるものである。

第2部は、資料編というべきもので、スターリンの論文和訳を、補訳・

¹ 文庫巻末に掲載。

掲載している。

第3部は、「第四章 スターリン言語学と日本」で、日本における受容・反応を扱っている。

以下、各部について論ずる。

1: 第1部（主問）について

本書の目的と方法、その達成を見てみよう。

予め言うておくべきは、スターリンの論述の根源を田中が紹介するもの以外に求めることは可能であろう、ということである。また、実際、そのような試みはなされている。スターリン言語学論文の執筆者を彼以外に帰する考えも当然ある¹。本書ではそれら全てが汲み尽くされてはいない。しかし、本稿ではそれを補うことはしない。それは次の理由による。

1：カウツキーの他、ロシアの政治家・社会思想家の影響があるに違いないとは思うのだが、スターリン（或いはロシアのマルクス主義者）の知的源流について筆者に論じる力はない。もっとも、源泉探しは発展性がなく詰まらない側面がある。

2：論文をスターリンが書いたのではないにせよ、スターリン論文が言語学の純粋な討論という以外に政略的な目的（例えば、シナ語を用いる中共との外交上の都合とか）があったにせよ、唯物論といった哲学上の考察の中でついでに言語に触れたにせよ、言語学のスターリン論文として（も）当時把握・受容されたこと。歴史的・社会的文脈で考えれば、スターリン論文のオリジナル性はともかく無視できるだろうからである。

1-1: 時代区分

田中は4期に分けている(41—42)。

第1期：『マルクス主義と民族問題』に代表される民族と言語について

¹ 参照：佐藤純一 「ソ連言語学界のグラスノスチ——言語学者スターリンの真相など」 『言語』(大修館書店)、第17巻第10号(1988〔昭和63〕年10月号)：18—23頁。

ての考え方が定まって行った時代」。

第2期：「一九二五、二九年の演説に見られる、抑圧されていた少数民族語解放の進行を誇示した時代」。

第3期：マール派の「新学説」を「ソ連の公認言語学として奨励した時代」。

第4期：「一九五〇年にマルの理論を自らの手で全否定するために『マルクス主義と言語学の諸問題』を発表した時期」。

章立てとの関係は、第1期が第一章、第2期は第二章、第3期は第三章第一節、第4期は第三章第二節以降である。第3期は詳述されていない。スターリンの奨励なくしてはマール主義の流行は考えられなかったことを思えば、スターリン言語学を考える上でこの時期も考慮すべきと思う。また、マール主義そのものについても記述が足りないようである¹。

1-2: コンテキスト

まずスターリン論文の「コンテキスト」即ち、歴史的・社会的文脈である。

「民族の問題の大部分は言語の問題である」(10)との考えのもと、西欧マルクス主義者とロシアマルクス主義者の違いが語られる。それは民族をどう扱うかであり、ロシアにあつては民族問題に取り組まざるを得なかったということである。スターリン論文は言語と民族の問題に関わ

¹マール主義の功罪について教科書的な知識を補っておく。

「マール主義は、ソヴィエト連邦における古典的言語学の伝統の長期に亙る中断を意味し、また残余の世界で起っていた重要な言語学上の出来事すべてとの隔絶ともなった。このことはソヴィエト言語学がマール主義のために蒙った最大の損失であり、その損失は、根本的に誤っていた一学説を発展させるために多年に亙り労力が費やされたという事実以上に大きかった。

マール主義時代の成果は当然殆どないが、それでもソヴィエトの言語学者が、語の意味の問題を社会生活との関連においても見るようになり、またソヴィエト連邦中の数多くの非印欧諸語の資料の蒐集と記述に対しても関心を増した、という成果はあった。」

イヴィッチ・ミルカ 『言語学の流れ』 早田輝洋・井上史雄共訳、1974〔昭和49〕

るものであり、田中はまず民族論を取り上げるのであった。田中は、スターリンが言語と民族の関係の問題を扱う根源を求めている。

スターリンによる民族の定義である。

「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である」(48)。

田中は1925年の発言を取り上げる。東方勤労者共産主義大学での演説である。「内容においてはプロレタリアートの、形式においては民族的な文化」(67)とのテーゼが提唱される。母語が重視され、田中はここからスターリンを「少数言語の解放者」(66)と見ている。この解放によりエンゲルスの言う「歴史なき民族」が固有の歴史を持ち始めたのだと。そして、スターリンは民族以前の民族体を扱う。民族自決権の問題が出てくるが、ロシアではまさにそれが問題であった。1929年の論でも母語が重視されている。母語解放が民族解放であることはスターリンにあっては変わることがなかった。

田中の言う「スターリンのフィールド」(23)とはこういうものであった。但し、ソ連言語政策の通史の中で捉えられているとは言い難い¹。

1-3: 思想の系譜

民族問題と言語の問題を結びつける思想の系譜として、ロシア同様民族問題に直面していたオーストリアの理論家たちがあげられ、オットー・バウアー、カール・カウツキーの名が示されている。バウアーは民族の決定要素として民族的性格 *Nationalcharakter* をあげた²。彼に対して、「民族性と国際性」 *Nationalität und Internationalität* (1908年1月 "Neue Zeit" 誌 別冊) で反論を加えたのがカウツキーであった。田

年(第3刷1987〔昭和62〕年): 75—76頁。

¹ ソ連の言語政策に関しては、例えば次を参照。

塩川伸明 「ソ連言語政策史再考」 『スラヴ研究』(北海道大学スラヴ研究センター)、No.46 (1999〔平成11〕年): 155—190頁。

但し、塩川論文では1950年の言語学討論は言及されるに留まり、マールについても「本稿の文脈で立ち入る必要はない」(168頁)とされている。

² ちなみに、*Charakter* は「ハラクテル」ではなく、「カラクテル」であろう。

中は、「ソビエトの言語・民族政策の原則は、ほとんどすべて、一九〇八年のカウツキーの、『ノイエ・ツァイト』別冊のこの論文から出ているのだ」(34)と断言する。それが、正しいかどうか、他に源泉はないのか、従来注目されていなかったのが、果たして田中が言うように、カウツキーが「背教者」と呼ばれていたからであるのか、疑問を呈することは出来ようが、本稿では扱えない。田中の発見に依れば、「内容においては社会主義的な、形式においては、つまり言語においては民族的な文化」(99, 204)「民族文化は、プロレタリア文化 [……] に形式を与える」(96)というスローガンもカウツキーに基づくのだという(98—99)。

他、勿論レーニンが挙げられている。マルクス・エンゲルス・オーストリアの理論家・レーニン・スターリンの関係は純粋な継承ではない。影響を受けると同時に反発もしていく 2 つのベクトルを持つ「思想的系譜」であった。

1-4: 正統的アカデミズムとの対比

正統的アカデミズムとしては、西欧マルクス主義者・比較言語学者の名が上がっている。それは、エンゲルスでありローザ・ルクセンブルクであり、メイエでありソンメルフェルトである。

エンゲルスにとっては、「歴史なき民族」は存在自体反革命的であった(20)。だが、スターリンは、民族以前の民族体をも歴史の舞台に登場させねばならなかった。

ローザは、ロシアのマルクス主義者達が主張した諸民族の自決権を「反動的な企て」とみなした(79)。

「メイエにとって、もはや時代に合わない、消えるべき、遅れた言語の生きのびに力のかすのは、いわば文明の法則にもとるものであった」(89)。

ソンメルフェルトは「言語の解放は民主主義に反すると述べた」(91)。

スターリン論文は「言語の脱イデオロギー化」(141)を唱えるものであった。しかし、ドイツのシュテルンベルガー、クレンペラー、イーバッハ、ヴァイスゲルバーらが、「イデオロギー的側面に関心」(148)

をよせたことも言及されている。

本書では、普遍言語志向・そのヴァリエントと言える「特定の言語だけに文明を担う力があるという考え方」(16)が西欧言語論の根にあったことも指摘され、スターリンと対比されている。彼にとっては、どの言語も社会主義文化に形式を与えることが出来るのである。

1-5:まとめ

このようにしてみると、田中は自らが設けた 3 つの問いに答えていることがわかる。但し、総じて記述の構成は必ずしもしっかりしたものではなく、トピックが複数の場所でばらばらに語られているという印象は否めない。

「言語思想の世界的な流れの一部をなすもの」「スターリンを通して語られた、一九世紀から二〇世紀言語学のコンテキストからみた、ソビエト・イデオロギー」ということも理解できる。言語思想の中で対極に普遍言語があり、文明語の特権思想があり、対極には、言語は形式という思想、少数言語の解放があるのである。後者を代表するのがスターリン言語学であった。その背景にあるのは、いや、その言語学から浮かび上がるソビエト・イデオロギーは、少なくとも理念上は、民族解放の思想だったのである。

田中には親ソ的な傾向がある。イデオロギーというものに真剣に取り組む姿を好ましいとしているのである。それは納得が出来る。だが、現実はいざしば理論と食い違う。民族解放イデオロギーの国で民族弾圧が行われたことも事実であった。民族というものの恐ろしさを知っていたからこそ弾圧がなされたとも言えるのだろうが、解放イデオロギーと弾圧、理論と現実の関係を田中には記述して欲しかった。せめて他の著作への参照指示でも、と思われる。

その際、現実には照らしてイデオロギー・理論に否定的態度をとるのも、イデオロギー・理論に淫し現実を無視するのも間違いだろう。同時に、現実の失敗からイデオロギーを救い出すのか、イデオロギーのドグマから現実を救い出すのかという問題は常につきまとい、態度の決定を我々に強いている。救うべきを救えるのか。

2: 第2部（翻訳）について

本書では、1954年刊行の大月書店版『スターリン戦後著作集』に田中が補訳したスターリン論文が掲載されている。田中は、「今はもう手に入らなくなっているスターリン論文を、おそらくこれを最後に、読者に提供する好機になるかもしれないと考えて」（292）行ったのだがそれは正しい。田中が勧めていた国民文庫版も、彼自身が述べているよう稀覯書である。資料という意味でも本書の刊行は価値があるものである。

但し、本書では、1：底本の問題、即ちスターリン論文そのもののテキスト史の問題、2：複数存在した和訳についての情報、が欠けている。

本稿では、それらに言及する他、3：誤訳（恐らくは誤植）の指摘もする。尚、田中が紹介するフーバー研究所刊行のロシア語テキストについては本稿末書誌に掲載した。

2-1：スターリン論文のテキストの問題

如何なるテキストで読まれたか、は常に重要な問題である。スターリン論文は、勿論、『プラウダ』紙に掲載されたものであり、それが初出だが、後に纏められて冊子となった。その際、テキストの異同が生じた可能性はないのかどうか、田中本書にはこの答えはない。ソ連本国・諸外国でのテキスト史はともかく、複数の和訳の底本はどのようなもので、それが日本の受容にも影響を与えなかったか、という疑問が生じる。もともと、これは疑問のための疑問とも言うべきもので、たとえ異同があったにせよ、本質的な違いがあったとは思えないのであるが。

だが異同は存在したようで、言及したほうが良かった。大月書店の『スターリンの労作『マルクス主義と言語学の諸問題』における弁証法的唯物論と史的唯物論』の付録に掲載されたスターリン論文和訳の注（595頁、岩波現代文庫版では225-226頁に当たる）に、「『またそれがいつ発生しよう』は『ボリシェヴィク』誌（一九五〇年十二月）に転載されている。この論文では脱落している」との記述がある。文意がよく分からなくなっているが、要するに原文、版に異同があるということが示されている。本書岩波現代文庫版にはその種の注はない。

2-2：複数の和訳

和訳は複数存在する。恐らく、先行訳は後続訳に利用されたのだろうが、その関係は本書にも書かれていないし、筆者も知るべきがない。具体的に幾つかの訳文を付け合わせ、共産党内外の翻訳活動の歴史を追うなどしなければならぬだろう。本稿では、田中が紹介するものに加えて早稲田大学図書館蔵のものを単に紹介する。土岐（善麿）文庫・津田（左右吉）文庫所蔵のものが多いが、この事実自体、当時の日本に於けるスターリン論文の受容を示している。単に所蔵していただけなのかもしれないが、ともかく、言語学者でもルシストでもマルキストでもなかった津田のもとに届くほどであったのである。

本稿末に書誌をまとめた。これが全てと主張するものではない。

まず、日本共産党中央機関誌である『前衛』1950年51号があげられる。田中が言うように極めて自然なことである。ここには2つの論文、『言語学におけるマルクス主義について』、『言語学の若干の問題について —同志クラシエニンコワへの回答—』が掲載されている。これはタス通信によったものであるということである。

加えて、「言語問題研究会」の手になる謄写版も存在する。『「言語学におけるマルクス主義について」および右論文への質問に対する回答』という54頁の小冊子である。津田文庫蔵。具体的な訳者名、底本は不明。出版年は記されていないが、早稲田大学図書館では「1950年？」としている。時枝誠記は、『中央公論』にスターリン論文評を書くに当たって、謄写版の和訳を見せられたということだが、引用文の参照頁はこの早稲田大学蔵書と微妙に食い違う。謄写版によるものが複数あったのであろうか。「言語学におけるマルクス主義について」「言語学の若干の問題について —同志クラシエニンコワへ—」〔ママ〕「同志ア・ホロポフへの回答」「同志サンセエエフへの回答」〔ママ〕「同志デ・ベルキンおよびエス・フレルへの回答」の5編が掲載されている。

1950年内には9月5日付けで、日本共産党宣伝教育部より、『言語学におけるマルクス主義』が刊行される。「まえがき」は8月のものである。訳者名は分らない。土岐文庫蔵。

1952年にはロシア文学研究者で共産主義に傾倒していた除村吉太郎

の編で『スターリン 作家への手紙 附録 言語学におけるマルクス主義について 日本国民にたいする新年のメッセージ』がハト書房から刊行される。底本は不明だが、日付をつけて『プラウダ』紙があがっているからこれがそうか。この書には翻訳者名が明記されている。訳文は共産党のものとは比べて良いとは思えない。ここには編者による解説が、1952年1月28日付けのあとがきとして付け加えられている。

「附録としてのせた『言語学におけるマルクス主義について』は最近におけるマルクス主義科学の劃期的労作であり、ソヴェト社会科学の各分野においてその後これに関連して多くの論文が書かれているし、文学の領域でもこれを契機として文学用語の問題が広汎にとりあげられた。この論文は、研究資料としては、また雑誌上にはすでに訳出されたが、単行本に加えるのは本書がはじめてである」（「あとがき」：181）。

この年には、大月書店の『スターリンの労作『マルクス主義と言語学の諸問題』における弁証法的唯物論と史的唯物論』の付録としても刊行されている。

1953年には「知識文庫」7号のトロシ著『自然科学とスターリン言語学』の付録として刊行されている。知識文庫刊行会が訳者である。底本は、1950年発行の「《リテラトゥラ・フ・シュコーレ》誌の四号と五号にけいさいされたもの」、同年の「国立政治文献出版所版のパンフレット《言語学におけるマルクス主義について》と《言語学の若干の問題について》である」（「はしがき」：3）。

同年初版で、田中も紹介する石堂清倫訳の国民文庫版が存在する。スターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』と併せて刊行されたものである。国立出版所刊行のパンフレットを底本とした由。早稲田大学には、1955年第10版、土岐文庫蔵がある。

1954年大月書店の『スターリン戦後著作集』は、『スターリン全集』補遺別巻となっている由。本書岩波現代文庫掲載訳の底本である。筆者未見。

2-3：誤植の指摘

「今はもう手に入らなくなっているスターリン論文を、おそらくこ

れを最後に、読者に提供する」はずであった、岩波現代文庫版和訳には、残念ながら、誤訳もしくは誤植が存在する。

「第一の誤りは、彼ら〔スターリンに反論する同志たち〕が言語を上部構造と混同していることにある。彼らは、上部構造に階級的性格があるとすれば、言語も全人民的なものであるべきだ、と考えている」(200)

ここは、当然逆であるべきで、実際、フーバー研究所刊行の原文では、以下のようにになっている。

Первая ошибка состоит в том, что они смешивают язык с надстройкой. Они думают, что если надстройка имеет классовый характер, то и язык должен быть не общенародным, а классовым. (Stalin. Works. Vol.3.: 129).

「彼らは、上部構造に階級的性格があるとすれば、言語も全人民的なものではなくて、階級的なものであるべきだ、と考えている」となる。

文意が通じないこと明らかで、直ちに誤訳・誤植と気付くのが不幸中の幸いだ、このようなことが一つでもあると訳文の信用は著しく損なわれる。訳文提供が「これが最後」なら極めて遺憾である。原文と訳文とをもう一度付き合わせるべきであろう（その手間をしなくてすむように訳文が刊行されたはずなのに）。

3: 第3部(日本での受容と反応)について

第3部に当たる第4章は「スターリン言語学と日本」であり、本邦における受容や反応を扱っている。

ここでは、1950年6月20日『プラウダ』紙にスターリン論文が掲載されるや、直ちに日本でも反応が始まったことが語られる。田中が言うように、言語学が日本で「不釣り合いに高い評価を得るようになった」(249)のが、紹介された「スターリン言語学」の「意外性と衝撃」(249)の故だったのかは定かではないし、また言い過ぎとも思われる。だが、ある程度の範囲内で知的関心と反応を引き起こしたのは確かである。田中が指摘するように、スターリンはジャーナリズムの話題となりやすいものだった。マルクス主義そのものへの関心もアカデミズム内外を通して現代とは比較にならないほど広範で強かったはずである。

ともかく、田中は、不十分なのが残念とはいえ、正当にも日本での

反応に言及している。これは、発表後 50 年の 2000 年に敢えてスターリン言語学を取り上げる意味でもある。即ち、現代日本の学問がどのような歴史を持つのか、我々の基盤は如何なるものか、どのようにスターリンを経て今に至っているのか、ということを考えなければならないのである。

特にロシア語研究者にとってはそうであろう。自分のやっていることがどのような背景を持っているのか、「ロシア語学」という枠組みの中でやっているはずだが、その枠組みはどのように形成されてきたのか、それが分かれば己の属する枠組みを知り、必要があればだが、変革することも出来る。また、研究の実際面から言っても、自分の抱えている問題がどのように扱われてきたか、を知らねばならない。田中の言葉で言えば、系譜を知らねばならないのだが、自覚されることは少ないのではないか。勿論、知らずとも優れた研究は出来るのだが、知らないと言うのはずいぶん暢気という感は否めない。過去の日本のロシア語学者達は、何を問題にしてきたのだろうか。彼等は、専門特化しておらず、現代の研究者より（深さはなかったかもしれないが）遙かに視野が広がったはずだし、ソ連全盛期であり未だ共産主義に希望が持たれていた時代にあってスターリン言語学に関して無関心であったとも思えない。彼等はそれにどう対処し、反応（消化あるいは無視）したのか。意図的な無視も、無視するもの前提を必要とする。加えて、日本のロシア語研究はソ連・ロシアの学問と離れては存在しない。本国の学問に程度の差はあれ左右されるのであり、ソ連・ロシアは、スターリン言語学を経てきたのであった。表現しなかったにせよ沈黙を守ったにせよ、こういったことに日本の研究者が鈍感だったはずはない。（尚、スターリン言語学へのソ連での反応もしくは他の諸国での反応はまた別個に扱うべきであり、それらと日本との関係も考えなくてはなるまい。）

3-1: 現代文庫版での記述

田中がまず挙げるのは、スターリン論文直後の研究会での反応、ジャーナリズムでの記事である。本書では、単に記事の著者名、雑誌名だけが挙げられているので、本稿巻末に補いを行った。幾つか未詳の

部分もある。

著者の記述によれば、流れはこうである(248-256)。

『プラウダ』紙で1950年6月20日、スターリン論文『言語学におけるマルクス主義について』、6月29日付け7月4日掲載『言語学の若干の問題について —同志クラシェニンニコワへの回答—』が発表されると、直ちに日本共産党はタス通信により中央機関誌『前衛』で此の如き和訳を行う(1950年第51号。)これは日本のジャーナリストを刺激し、特集が組まれることになる。そして小林英夫や時枝誠記が訳文を読むことになる。

他、「民主主義科学者協会言語科学部会」の活動があった。

当時、用いられていた訳書について、田中は「小規模な謄写刷りの小冊子」であろうと想像している。恐らくそのような小冊子は複数あったのであろうが、その一つとして、言語問題研究会から恐らく1950年に刊行された54頁の謄写版冊子があげられよう(早稲田大学図書館蔵、出版年は図書館側の推定)。

更に、寺沢恒信の証言として、「スターリンの言語論」を論題として、1950年9月30日(土)に東大法文経29番教室で、民主主義科学者協会東京支部によるシンポジウムが開かれ、大島義夫、石母田正、三浦つとむの報告があったことが述べられる。本書には書かれていないが、同様の証言が三浦つとむにもある(但し、東大歴研との共催、開催は20番教室とのこと)¹。

続いて、雑誌に、時枝誠記、村山七郎の論文が掲載される。

翌年1951年になると、『文学』誌2月号にスターリン言語学をとりあげた幾つかの論文が掲載される。

大学の紀要類での反応論文の例としては、本書では1例のみ、東京外大の東郷正延論文のみが言及されている。

1952年、先の東大でのシンポジウムが、民主主義科学者協会言語科学部会の監修で『理論』誌別冊第2集『言語問題と民族問題』にまとめられた。残念ながら筆者未見。

¹ 三浦つとむ 『三浦つとむ選集1 スターリン批判の時代』 勁草書房、1983〔昭和58〕年：43頁及び50頁。

田中は、これらを総括し、スターリン論文の性格が民族語のみを認めるものであったことを述べ、「全般的に言語への保守的な態度を正当化する効果すらもって」おり、左翼知識人を困惑させたと言う(256)。そして、『『国語問題』への保守的な態度への励ましを見出した』(256)者も出てくる。

田中が紹介する記事の中でも注目されているのは、時枝誠記、村山七郎、タカクラ・テル、蔵原惟人の4人である。特に時枝については一節を設けて詳述している(第4章第2節:257—267)。

時枝誠記 「スターリン『言語学におけるマルクス主義』に關して」『中央公論』 1950年〔昭和25年〕第15号:97—104頁。

この「感想文」に田中が注目するのは2点である。1:「時枝は、スターリンが、言語を上部構造に属さないときっぱり言いきって、この面倒な問題そのものの存在をもみ消したことに疑問を呈した点」、2:「言語は『それ自体の内的発達法則に従って』発達するとした観点に同意できないと表明した点」である(260—261)。

村山七郎は「本物の言語学者」(267)で、当時の「スターリン論文の背景と目的を知ろうという需要」(266)に応えるべく、「ソ連からの亡命モンゴル語学者ニコライ・ボッペによるソビエト言語学の評価を手がかりに、主として、スターリンの批判の対象になった、マルのヤフェット語理論を批判的に紹介した」(267)のであり、「当時として大変重要な役割りを果たされたのである」(267)。

村山には、田中が紹介する記事の他、幾つかの発言がある。管見では、村山七郎 「スターリンと言語学」『共産圏問題』(欧ア協会) 第6巻第4号(1962〔昭和37〕年4月):25—41頁。

村山七郎 「ソヴィエト言語学の日本のインテリ」『民俗と歴史 民間傳承』 第234号(1958年〔昭和33年〕7月):27—29頁。
というものがある。この中では、言語年代学という形でのスターリン言語学の服部四郎への影響が語られている。

タカクラ・テルについては、時枝・村山ないしは蔵原に比べて知名度が低いことは否めない。それなりの伝記的な情報が欲しいところであるが、本書にはそれは見られない。ともあれ、単なる宣伝家ではな

く、ヨーロッパ言語学をきちんと学び、その批判をマール言語学に依拠して行う (269)。その基本テーゼは「言語は階級的である」というもので、これはまさにスターリンによって滅ぼされたものである。

田中が述べるところでは、マールが完全否定された 1954 年になっても「タカクラは、マルの名を出しながら言語をかたることにためらいを見せなかった。それだけでなく、『スターリン論文』には一度もふれたことがなく、何ごともなかったかのように過ぎていった」(273)。

しかし、田中のこの記述は事実に反する。1951 年『理論』誌掲載の「言語もんだいの本質」というタカクラ論文は「昨年 (一九五〇年) の五月から、ソビエト共産党の中央きかん紙『プラウダ』で言語学にかんする論争が行われ、その結びとして、スターリン首相が発言した」(『理論』第 16 号:1) という文で始まって、スターリン論文の背景を考えているのである。これは、次の蔵原論文への再批判であった。

さて、『「スターリン言語学」』を特集した雑誌にも、一度もタカクラ・テルの名を見出すことはできない」(273-274) のであったが、蔵原がタカクラを攻撃する。

蔵原惟人 「今日における言語の問題」 『文學』(岩波書店) 第 19 卷第 2 号 (1951 年 2 月): 43-52 頁。

ここで、蔵原は、言語は何よりも民族全体共通のものであるという「スターリンにすっかり同調し」(275)「戦後日本の言語的保守主義の基礎を作ったのである」(275)。田中に依れば、「スターリンは、日本の言語的保守主義者に心強いはげましを与えた。戦後日本の言語的保守主義、復古は、スターリン言語学の受容とともに最初の一步を歩みだしたのである」(275)。スターリン論文は、「日本の左翼歴史家やいわゆる進歩勢力が拠っていた階級観」(275)の「土台を一方的につきくずしてしまったのである」(275)。

補足的に、イリーンの名著『人間の歴史』にもマール主義の影響が見られることを指摘している(276-282)。

その他、別の箇所でも、

石田英一郎 「唯物史観と文化人類学 一とくに文化の構造と人間性の問題をめぐって一」 『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所) 第 9 冊 (1956 [昭和 31] 年 3 月): 1-22 頁。

ドイツ統一社会党中央委員会編 『唯物史観の諸問題』 相原文夫
訳 三一書房、1954〔昭和29〕年、316頁。

コンスタンチーノフ・アレクサンドロフ監修 『スターリンの労作『マル
クス主義と言語学の諸問題』における弁証法的唯物論と史的唯物論』
ソヴェト研究者協会訳、大月書店、1952〔昭和27〕年、609頁。

があげられている。石田論文はアメリカ文化人類学とスターリン論文の
相似を述べたものだが、田中に依ればそれは「不気味な符合」(289)で
あった。如何なる意味で「不気味」なのか、必ずしも明らかではない。

著者の意図は、マルクス主義及びスターリン言語学の日本に於ける受
容・反応の通史を書くことではなかったであろう。だが、この問題は、
日本の学問の根、現代の研究者のパラダイムを知るためにもより詳しく
扱わねばならないはずである。

3-2: 文献補足

3点補っておく。勿論、これで全てではない。

森下眞佐子 「問題の新文献Ⅰ 言語学におけるマルクス主義 —
スターリンの二つの論文— 『理論』(理論社) 第14号(1950〔昭
和25〕年9月): 75—84頁。

これは、『ブラウダ』での討論を「批判と自己批判を強化して飛躍的
な発展の途を進みつつある戦後のソヴェト学界の動向を示すもの」
([『理論』第14号:75)とみなし、スターリン論文を「マルクス主義言
語学の分野での最も輝かしい成果である」(同)として祖述・紹介した
ものである。5論文全てに言及されているが、「二つの論文」即ち「言
語学におけるマルクス主義」と「言語学の若干の問題について」が詳
しく、残りの3編については追記の形で述べられている。

藤沼貴 「ソヴェト言語学の動向 —ロシア語研究・教授の前提と
して— 『早稲田大学語学教育研究室紀要』 第1号(1962年〔昭
和37年〕9月): 23—39頁。

1961年8月に書かれ、早稲田大学語学教育研究室(所)の紀要論文

として発表されたこの藤沼論文は、まさに「語学教育」という問題意識から生まれたものである。田中とはまた違った視点から、スターリン問題に光を当てている。

藤沼は、「日本のロシア語研究の未発達、未分化の状態」(23)¹故に専門家のアドバイスを得られないため、「一介のロシア語教師」(23)であっても、自ら言語学に取り組みざるを得ないことを指摘する。そして、このような状況で、現在「不満と不安」(23)を感じているロシア語教授法を「改善するためのよりどころ」(23)を得るためには、ソ連本国の言語研究の状況を知らなくてはならないと述べる。

藤沼の問題意識は明確で、彼自身述べているように現代ロシア語研究が関心の中心にある。だが、「ソヴェト言語学の特殊性のために、現代語研究それ自体を切りはなしてとりあつかうのは困難であり、言語研究一般の問題に還元する必要があった」(24)のであり、「ソヴェト言語研究の現状について述べるためには[.....]スターリン論文に、また、それと関連して、マールの理論にまでさかのぼる必要がある」(24)から、ソ連の言語学史を問題にしなくてはならなかったのである。

この上で藤沼は、田中も言及しているブイコフスキー著、高木弘訳の『ソヴェト言語学』、またマールの選集、ソ連の言語学専門誌『言語学の諸問題』の論文に基づいて、マールの「新学説」ないしは「ヤフェート理論」を述べていく。藤沼の見るところ、マール主義が絶対的権威になった理由は2つである。1:「多少とも見こみのありそうな見解に、性急にイデオロギー的武装をしいた当時の客観的状勢」(27)という「科学とはまったく別の次元に属する問題」(27)があったこと、2:「マルクス主義的態度が実証的研究をおこたって粗雑化される時、『言語は上部構造である』、『言語は階級的である』等の帰結がうまれる危険があるということである」(27)。

従って、「マルクス主義的見地に立とうとするソヴェト言語学は、今でも一方の端に『新学説』におちいる危険をひそめている」(27)という。「いわば、ソヴェト言語学が立っている道の片端には、『危険！ これ

¹ 以下、()内に藤沼論文の頁数を示す。

より先行くべからず』と書いた立札が立っている」(27)のであり、これが「ソヴェト言語学の性格を規定する一つの要因」(27)である。

そして、1950年、スターリン論文が登場する。「問題が重要だったからこそ、スターリンが登場したと考える方が正しい。『新学説』の権威は、スターリンの権威をもってしなければ否定できないほど、強力だったのである」(28)。だが、その論文は「言語の本質を明らかにすること、きわめてすくない」(29)。またソ連の学界に於いても「スターリン発言をうらづけようとするところみが、なされていない」(30)。

結局、藤沼の結論はこうである。

「言語学についてのスターリンの発言の意義は、もっぱら、『新学説』を否定したという、消極的な点にある」(30)。進入禁止という札を立てた論文は意義あるものだが、「スターリンの発言を、言語学的に何か意味あるものと考え、積極的意義を与えるならばそれは新しい不合理なワクを、ソヴェト言語学にはめ、『新学説』時代と同様の停滞をひきおこす可能性があった」(30)のである。

その後、1950年の討論から1956年初めまで「スターリンの発言を言語学的に意味あるものと考え、それを積極的にとりいれよう」と(30)する時期が続く。「スターリン発言は『この先行くべからず』という禁札と受けとるのが安全だったのに」(30)『「近道はこちら』と判読」(30)されてしまった時期である。

この時期の性格として藤沼が指摘するのは、他の時期と共通する「歴史主義」である。1956年の科学アカデミーの言語学の課題を4つあげている。

「1. 意義論と辞学(辞書編集と関連して)の基本的諸問題。2. 民族体と民族の時期の全民族的言語、および諸方言発達の法則性。3. 標準語の形成、発達のもっとも重要な諸問題。4. さまざまな語族、言語グループの比較・史的研究の諸問題」(31)

だが、「新学説」も歴史主義であったこと、言語と社会の関係への関心はソ連言語学の特徴で時代の特殊性とは言えないことが注記されている(31)。

スターリンによって比較言語学的方法が許され、公認されるのもこの時期であった。だが、「この時期にはまだ言語研究全般を、歴史主義

でおし通そうとする態度があり、それがこの時期を世界的な傾向はもちろん、ソヴェト言語学のもっとも新しい方向〔「構造主義」〕からも区別している」(32)。

しかし、藤沼の考えでは、「歴史主義の普遍化が、言語現状の分析を軽視させるほどになる時われわれロシア語教師は困惑する。言語の歴史的研究がどれほど進んだところで、また歴史的見地や、発展の流れの中で、現代語がどれほど説明されたところで、あまりわれわれのたしにならないからである。そのような成果は、言語について教えるところが多く、言語そのものを明らかにすることがすくない。現在の言語それ自体を知るには、別の見地が必要なのである」(33) (強調原文)。

この上で、1952年～54年アカデミー刊行『ロシア語文法』を「1950～55年のソヴェトにおける現代語研究の実態」(34)を象徴するものとしてとりあげ、その「規範的・記述文法性」が実はソ連言語学の集大成であることを示し、「規範・記述文法への反省と批判が欠けて」(34)いて、現代語研究の分野では不毛であったこと指摘する。

1956年第20回党大会以降、個人崇拜批判が行われ、「言語学をめぐるスターリン発言の弊害」が防がれることになる(35)。そして、「構造主義」という名のもと「西欧近代言語学」が取り入れられてくる(35)。しかし、藤沼は、構造主義に対する反対が根強いことを指摘し、その理由を「歴史主義の固執」に見る(36)。但し、その固執による反対は「後退を余儀なくされている」(36)。

結論として、藤沼は1961年執筆時現在、ソ連言語学の模索期が終わりに近づいているとする(37)。但し、藤沼が当初求めていた語学教育上の理論的基盤は、ソ連言語学の混乱が解決していない当時であってはなく、「外国語教科書、外国語教授法の面でのソヴェトの成果は、理論的基盤より、むしろ、実際の経験の集積の上にもうまれているのだといえる」(38)と嘆いている。

藤沼論文はロシア語への取り組みを振り返り、先を見通そうというものであった。彼はその後、早稲田大学でロシア文学とロシア語学を教え続け(筆者は最後の世代の弟子になる)、最終講義もせずに大学を

去ることになる。その間、学問は専門特化・細分化し、「構造主義」は学界の主流となり¹（そして廃れつつあるのかもしれないが）、言語や社会、民族を扱う学問がお洒落な名前で現れてきた。そこには、勿論、木村・佐藤・千野・藤沼の活躍があり、「危険な挑戦」を続ける田中の啓蒙活動があった。だが、藤沼が1962年に感じた教授法や教科書に対する「不満と不安」は解決されたのだろうか。筆者が実際に聴講した講義では否定的な発言しか聞かれなかった。また、現代のロシア語教師は、藤沼と同じ問題意識を持っているのだろうか。自分が教わったとおりに教え、何ら教授法に自覚を持たない教師もいるのではないか（勿論、教授法を意識していても良くない教師というのはいるし、教授法について特に学んだことがなくても優れた教師というのはいる。教授法で何とかなるならそれをコンピュータに入力して機械に教えさせれば良いことになる）。

佐藤純一 「ソ連言語学界のグラスノスチ——言語学者スターリンの真相など」 『言語』(大修館書店)、第17巻第10号(1988〔昭和63〕年10月号)：18-23頁。

佐藤論文は、スターリン言語学を扱ったゴルバネフスキイの『文学新聞』紙記事を紹介、着目すべき点を述べたものである。題目から明らかかなように、本論文はソ連末期のペレストロイカという文脈の中にあるが、単に時流の尻馬に乗ったものではない。佐藤自身「かつてこの論争に至るソ連言語学界の状況と論争そのものについてややくわしく調査した者」(『言語』17-10：19)であった。

佐藤はゴルバネフスキイに従ってスターリン論文発表の経緯を述べ、「アメリカに対抗できる唯一の強国となったソ連の顔としてのスター

¹ 現代日本の学界の代表として千野栄一と佐藤純一が挙げられる。スラヴィスト佐藤は、自ら(と千野)の系譜として、「ロシア語の勉強の行き着くさきにスラブ研究の分野があることを」教えた徳永康元、日本に於ける「スラブ語学文学研究を確立」し「将来の研究の道筋」を示した木村彰一の二人の名を挙げている。木村は、また、ヤコブソンの弟子でもあった。

佐藤純一 「ロシア語」(特集I・外国語と私) 『言語』(大修館書店)、第17巻第8号(1988〔昭和63〕年8月号)：81頁。

リンは卓越した理論的指導者である一方、民主主義の実践者でなければならなかった。こうした判断がスターリンに〔言語学の〕公開討論による路線の変更という手段を選ばせたのである」（『言語』17-10:21）という考えに原則同意している。

ゴルバネフスキイはスターリン論文の悪影響を述べていると言うことであるが、佐藤は「しかし、たとえオリジナリティはなくとも、専門家の諸説を適切に取り入れ、一般的な立場からの正しいアプローチの方向を指示し得たとすれば、当時のスターリンの絶対的権威を考慮すれば、予想される混乱の收拾策としては十分であったとする評価も可能ではなからうか」（『言語』17-10:22）と、スターリン論文の意義を認めている。もっとも、藤沼同様、消極的なものとみている。

他、『プラウダ』論争への「スターリン自身のコミットメントの程度」（『言語』17-10:21）、論文のスターリンの *Autorschaft*（『言語』17-10:22）に問題が残っていることが指摘されている。

また、マールの言語理論やポリワノフについて自著を紹介している。

佐藤純一 「言語の進化と革命」 『言語』（大修館書店） 第1巻第6号（1971〔昭和46〕年）：19—26頁。

佐藤純一 「ポリワノフ（リレー連載＝大言語学者たち 11）」、『言語』（大修館書店） 第5巻第2号（1976〔昭和51〕年）：98—108頁。

佐藤のゴルバネフスキイへの態度は冷静で、マール派の被害者に関する記述にも幾つか疑義を呈している。但し、新聞記事紹介という文章の性質上、詳述されていないのが残念である。

3-3: 「反応」の現代性

ともあれ、スターリン論文によってマール主義という歪んだ「歴史主義」から解放された。

田中によれば、「ソ連邦の言語学界の上に暗く垂れ込めていた暗雲は一挙にとり払われて、明るい自由の陽ざしがひろがって行」（283）¹き、「脱イデオロギーの自由を満喫した」（276）。だが、そこに問題がある

¹ 以下、再び（）内に田中本書の頁数を示す。

ことを、田中は時枝とともに忘れはしない。言語学がイデオロギーから自由であり得るといふ幻想、イデオロギーを括弧の中に置いてあたかも客観的科学的に学問できると思ふ暢気、現代に於けるイデオロギーとの対決の必要を思えば、日本でのスターリン論文への反応は現代的なテーマに満ちている。

但し、大上段に理論を振り回し、地道な研究を軽んずるのは大いに危険であり、それは破綻してきたあらゆる「主義」が示している。

4: マルクス主義プロパーの受容

スターリン論文は、言語学プロパー以外に、当然のことながら哲学及び社会科学の、即ちマルクス主義を教えるものとしても理解された。日本での反応を考える場合でも、マルクス主義史の中で考える必要が当然出てくる。

民族と言語、国家の問題をソ連・モンゴルをフィールドに考える田中はそれに気付いている。

スターリン論文は「固有の言語学よりは、むしろ、哲学、歴史学、経済学の分野の関心を引いた。それは一つには、言語学に隣接する諸学が抱いていた、孤立して閉鎖的な言語学との接点を求めようという潜在的な関心を刺激する面をもっていたからだ」(131)。

田中は、同時に、言語学側からの社会学への接近、ないしは言語と社会の関係を体系的に扱う理論的基盤を求めての期待があったことにも触れている。だが、田中の見るところ「この論文は読者のそのような期待に応ずるようなものではなかった」(132)。『『言語学のマルクス主義化』の努力が、すべて、ばかげた、無意味なものとして捨て去られ」(132)だからである。そして、マルクス主義陣営の反応として、1951年ドイツ統一社会党中央委員会主催の理論会議を例に挙げ、それは意味のある内容を持つものではなく、「いましめからの解放を記念する、うやうやしい儀式として行われた」(133)とする。

スターリン論文は期待には応じられなかったが、それでも、スターリンの論文は当時にあつて読むべきものとされていたことは間違いない。ここでは日本での現象に注目し幾つか事実の指摘をしておく。既にマルクス主義史研究の中での論考もあろうかとは思っている。

4-1: 日本での現象

スターリン論文がマルクス主義ないしは史的唯物論のものとして受容されたことを如実に示しているのが、邦訳（紹介）に於ける種々の解説である。

1950年の言語問題研究会謄写版『「言語学におけるマルクス主義について」および右論文への質問に対する回答』では、「まえがき」で、「たんに言語学のためにだけ有益な論文ではない。この論文はマルクス主義および史的唯物論に関心をもつすべての人に巨大な意義をもつ論文として注目しなければならぬ」（「まえがき」:1）とした上で、「社会主義的民族の形成に当面しているソヴェト同盟にとって劃期的な実践的意義をもつとともに、史的唯物論の新しい段階における具体化として注目すべきである。それは日本における史的唯物論のあらゆる機械的＝無政府主義的理解にたいする適時の批判であり、すべての歴史的諸科学の前進に役立つし、また役立たせねばならない」（「まえがき」:2）としている。

1950年の森下眞佐子による『理論』誌での紹介では、スターリン論文は、「単に言語学という専門的な分野での価値以上に、マルクス・レーニン主義の物の見方、考え方について、とくに史的唯物論の分野での種々な偏向にたいする鋭い批判として、マルクス・レーニン主義の純化のためにきわめて大きな価値をもっているものである」（『理論』第14号:75）とされる。

1953年初版の国民文庫版は、スターリンの「無政府主義か社会主義か？」（1906-1907）、「弁証法的唯物論と史的唯物論について」（1938）とともに邦訳を掲載しているものだが、国民文庫編集委員会が解説を行っている。

「スターリンの哲学は、弁証法的唯物論の、現在までにおける発展の最高段階をしめすものである」（第10版:199）。そして、1950年の論文は、「言語学を主題として書かれたものであるけれども、そのなかには哲学的な問題に関係するところが多い。しかも、のちに述べるように、ここには弁証法的唯物論と史的唯物論の新しい発展段階がしめされている。だから、この論文は、弁証法的唯物論の最高段階としてのスターリンの哲学をまなぼうとするものにとってどうしても見のが

すことのできないものである」(第10版:200)。

「ソヴェト言語学の基本的な問題に解決をあたえたばかりでなく、哲学、歴史学、文学、経済学、法律学などの分野における諸問題にもすぐれた解決をあたえた。この論文は、哲学にかんする論文としてみると、第二の論文〔「弁証法的唯物論と史的唯物論について」〕のようなまとまりはしめしていない。しかし、いくつかの問題について、第二の論文に述べられているよりもさらに深い研究がくわえられており、よりただししい解決があたえられている」(第10版:204--205)。

「弁証法的唯物論と史的唯物論について」が「哲学におけるレーニンの段階の最高の成果をしめすもの」(第10版:206)である一方、スターリン言語学論文は「あえて哲学におけるスターリン的段階と呼びうるものがあらわれているように思われる」(第10版:207)。つまり「すべての道が共産主義に通じるといわれている時代の歴史的条件のなかでの弁証法的唯物論と史的唯物論の発展である」(同)。解説者の見るところ、上部構造の理解が深まったので「言語が上部構造ではないことがあきらかになったし、また国家の死滅にかんするエンゲルスの有名な命題をもただしく理解することができる」(同)。そして「社会主義社会の発展法則が解明されたことによって発展の二つの形態が区別され」(同)で「質的变化を爆発によるものと漸次的移行によるものとの二つの形態に区別しなければならない」(同)ことになる。「これは弁証法的唯物論におけるきわめて大きな発展」(第10版:207--208)で、それが成されたのはソ連の経験によるものでこれで「社会主義から共産主義への質的变化を漸次的移行によってなしとげるといふ偉大な実践上の見通しが立てられるのである」(第10版:208)とする。

「国民文庫」でも薦められている1952年大月書店刊行、ソ連科学アカデミー哲学研究所編集、ソヴェト研究者協会訳の『スターリンの労作『マルクス主義と言語学の諸問題』における弁証法的唯物論と史的唯物論』は、原書編集者によれば「マルクス主義＝レーニン主義の宝庫への、弁証法的唯物論と史的唯物論の発展への、卓越した寄与」(「まえがき」:3)で和訳も「わが国の哲学界に、創造的マルクス主義の新しい学風をうちたてること」(「訳者まえがき」:2)に役立てようとなされたものである。

1950年51号日本共産党中央機関誌『前衛』掲載のものには特に解題がない。

同年、党出版局刊行のものでも「言語学を正しいマルクス主義的軌道にのせている此等の諸論文は、極めて貴重な文献」と「まえがき」で述べるのみ(Ⅱ)。

除村吉太郎編の52年ハト書房版でも同様である。

岩波現代文庫版の底本大月書店版で如何なる解説がなされているか、筆者未確認である。

勿論、以上の解題は建前として書かれたことである。これが本気であったのかどうか、もはや言語学の範囲を超えることである。

5: 「ロシア標準語史」の場合

スターリンの言語論は、当然ながら言語学の様々な分野 Disziplin に反映した。それを「ロシア標準語史」という場で見たい。

本分野はソ連期に成立したものであり、ガルシコフに拠れば、成立に関わった者として、ラーリン(1893—1964)、ヴィノグラードフ(1894/5—1964)、ヴィノクル(1896—1947)、エフィーモフ(1909—1966)の4人の名が挙げられる¹。このディスツィプリンはある学問領域であると同時に、大学での「授業科目」であった。学問領域としても「標準語」あるいは「標準文章語」なる対象は漠然であり²、文芸史や社会思想史、政治史と関わるものだけにそもそもイデオロギー的な言説で満たされる素地が多分にあった。加えて、大学はイデオロギー教育の場でもある。一定の通念を意識的にか無意識にか教え込む場である。

「ロシア標準語史」は、ある一定の史観を語史というフィールドで教

¹ См.: Горшков А.И. Теоретические основы истории русского литературного языка.—М., 1983.—С.3.

² 「標準語」あるいは「標準文章語」はロシア語で литературный язык. この用語の語誌と不明瞭性を知るには以下が多少とも役立つかも知れない。
小林潔 「Литературный язык をめぐって」 『ロシア文化研究』(早稲田大学ロシア文学会)第4号(1997年):99—110頁。

えこむという機能を持っていたのである。その意味で、本分野は政治的な性格を持ち、社会の思潮と無関係ではない。(筆者は、「ロシア標準語史」の全ての研究がイデオロギー的偏向を持つといているのではない。ソ連期にも地道で実証的な研究がこのタイトルのもとで行われている。)

5-1: エフィーモフの教科書

このような性格を具現しているのが教科書である。例としてエフィーモフの『ロシア標準語史講義』を挙げる。

Ефимов А.И. История русского литературного языка. Курс лекций.— М.: Изд-во Московского университета, 1954.— 431 с.

はこの分野の最初の教科書と言って良いものである。モスクワ大学で刊行され、版を重ねた。初版 5 万部である(ロシアの古本屋でも決して珍しい本ではない)。

本書はスターリン論文の引用に充ちている。ソ連の書物ではマルクス・レーニン(スターリン)の引用が常識であり出版に必要であったこと、言説には強弁というものがあり、人を酔わせるために空疎な言葉を重ねることがあり、また、スターリン論文もそもそも論者の立場に従って(言語は乱暴な言い方をすれば民族的とも階級的とも言えて)どのようにも利用し得るものであること、などの事情を差し引いても、スターリン論文後「歴史主義」を主流としたソ連での大学教科書に於けるスターリン利用は興味深い。しかもモスクワ大学である。スターリン言語論のどのようなトピックが使われているか、或いは、どのようなトピックでスターリンが利用されているか、スターリン論文の受容・影響を考える上で知るのは無駄ではない。

54 年の初版を見てみよう。本書は 21 の講義(章)からなるが、総論ないしは原理編は第 1、2 章である。ここにスターリン論文が集中して引用される。各論にもスターリンからの引用は散見されるが、「真つ当な」言語学者からの引用も多くなる。第 1 章は「標準語とその歴史の研究課題」、第 2 章は「ロシア標準語とその文化的歴史的意義」である。スターリンを引いたトピックを順に追う。

第1章「全人民的な言語の最高形態としての標準語」の節。言語は、担い手であるナロード（人民・民族）と結びついていること（Ефимов: 4）：「言語とその発展法則が理解されるのは、言語が社会史や人民の歴史と緊密にむすびつけて研究されるばあいだけである。というのは、いま研究しようという言語はこの人民のものであり、人民が言語の創造者で、保持者であるからである」（岩波現代文庫版:206）。「ナロード」はここでは「人民」と訳されている。

「標準語の文字・書物的ヴァリエントと口頭・口語的ヴァリエント」の節。言語発達に於ける文字の意義（Ефимов: 12）：「ひきつづく生産の発展、階級の出現、文字の出現、統治のため多少ともととのった文書のやりとりを必要とする国家の誕生、ととのった文書のやりとりをさらに多く必要とする商業の発展、印刷機の出現、文学の発展——これらすべては、言語の発展に大変化をおこした」（岩波現代文庫版:211）。

「規範化された言語としての標準語」の節。言語規範は言語発達に従って変化すること（Ефимов: 14）：プーシキン時代から現代までの「この期間にロシア語の語彙はいちじるしく補充された。たくさんのすたれた単語が語彙構成からぬけおちた。多くの単語の意味がかわった。言語の文法構造が改善された」（岩波現代文庫版:189—190）。

「俗語・方言・標準語」の節。社会的な文体の存在（Ефимов: 17）：言語は全人民的なもので階級的なものではないと同時に「だが、人間、個々の社会グループ、諸階級は、けっして言語にたいして無関心ではない。彼らは、言語を自分たちのために利用し、独自の語彙や独自の用語や、独自の表現を言語におしつけようとつとめる。とくにこの点で目だつのは、人民からはなれ、人民をにくむ有産階級の上層部、すなわち門閥貴族やブルジョアジーの上層部である。『階級的な』方言や通用語やサロン『語』ができあがる」（「語彙」に「レキシコン」、「用語」に「テルミノロギイ」、「方言」に「ディアレクト」、「通用語」に「ジャルゴン」というルビ）（岩波現代文庫版:194）。

「標準語の文体への階級的利害の反映」の節。標準語にもそういうものがあること（Ефимов: 28）：言語は階級的現象ではないが、階級は言語に無関心ではなく、言語のうちに「〔階級に〕特有の単語と表現をもちこみ、ときとして同一の単語や表現にちがった解釈をくださいこと

がある」(岩波現代文庫版:227, [] は訳文にあり)。

第2章。「ロシア語の豊かさと力強さ」の節。ロシア語の民族的独自性(Ефимов: 42—43):「ロシア語は歴史的発展の過程で多くの他民族語と交配され、いつでも勝利者となったのである」(岩波現代文庫版:215)。

この他、14—16世紀の言語変化について(Ефимов: 116):「この期間にロシア語の語彙はいちじるしく補充された。たくさんのすたれた単語が語彙構成からぬけおちた。多くの単語の意味がかわった」(岩波現代文庫版:189—190)というプーシキン時代・現代間の変化についての記述を語彙変化一般の法則として敷衍している。

また、17世紀の標準語の機能拡大についての項目で、マールとその信奉者に言及し、彼らは言語発展を「爆発」によるものと見ていたと批判して、スターリンを引用する(Ефимов: 127):「言語は「現存の言語の基本的要素を発展させ完成することによって発展したのである」(岩波現代文庫版:211)。

こうしてみると、スターリン論文の都合の良い部分ないしは「無害」な部分が引用されているという印象は否めない。例えば、スターリン論文の本質とは言えない語彙の変化についての言及が2度も引用されていたり、階級的な「文体」があるというスターリンの留保が積極的な意義を持つものとして引かれている。そこでのスターリンの主張は、階級的な要素があっても全人民的言語の発達には影響しないというものであった。言語の「階級性」を言うために、「階級性」をまさに否定したスターリンを引用したことになる(「階級性」というより「階層性」だが)。エフィーモフは、錦の御旗とすべくスターリン論文を便利な道具としていたかのようなのである。それだけスターリン論文は言語学にとって使いやすいものであった。言語学にとっては毒にも薬にもならなかったとみなすことが出来る(但し、「交配」なる術語使用には問題はあろう)。

だが、自分の言いたいことを言うためには党の権威によらざるを得ないソ連では、スターリン論文はその抛り所を与えたのであり、消極的ではあっても意義あるものであった。そして、「標準語史」なる分野

は、言語学の中でも哲学・歴史・社会科学に近い存在であり、それ故、スターリン論文を使わなくてはならなかったし、また使うことが出来たのである。

5-2:その他の諸家

ヴィノクルはスターリン論文以前に死去している。マール批判はしている。ヴィノグラードフやラーリンについては本稿では割愛する。但し、エフィーモフの教科書には、ヴィノグラードフの論考「スターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』とソヴィエト言語学の発達」も引用されている¹。「標準語の芸術的美学的特質」という節である(Ефимов: 34,35)。本稿ではこの種の問題は扱わない。

また、本分野の代表的な学者としてフィーリン(1908—1982)の名が挙げられよう。彼は、ある説では、極悪非道のマール主義者で、スターリン論文後も生き延び、マール主義との過去の繋がりに黙し、アカデミズムの頂点に上ったといわれる²。だが、これについても書評の範囲を超える問題である。

マール主義は歴史言語学批判という側面をも持っていた。スターリンはマールを滅ぼし、伝統的な歴史比較言語学を復権させた。ソ連では「歴史文法」と呼ばれる学統がスターリン礼賛とともに復活する。だが、歴史言語学に非難の余地がないわけでもあるまい。マールの遺産は類型論として残っているように思われる(田中はメシチャニノフの名を挙げているが、実際彼は注目すべき学者である)。比較言語学・マール・スターリンは、比較的方法の限界認識からの出発と後退という文脈でも把握できるだろう。

5-3:まとめ

ソ連の学問は脱イデオロギーされて日本でも行われる。日本の学界

¹Виноградов В.В. Труд И.В. Сталина «Марксизм и вопросы языкознания» и развитие советской науки о языке.—[М.,?]1951.

² 参照：佐藤純一 「ソ連言語学界のグラスノスチ」：23頁。ここではゴルバネフスキイの記述が紹介されている。

に於いては、ソ連での標準語史研究の実証的な部分だけを用いることが望まれ、イデオロギー臭を抜き「偏向」に陥らない能力が必要とされたのではないだろうか。それは成功したと思われる。むしろ、あまりにも実証的なため不満さえ覚える程であるが。ただ、「実証性」とか「構造」とか、我々が「科学的」と信じていることも歴史的社会的に規定されているパラダイムなのかも知れない。自らの方法を客観視する為には、過去を学ぶことが必要と思われる。「標準語史」は、その生まれより「イデオロギー」を内包している。研究者はスターリン論文を読まなくてもよいかも知れないが、研究分野の思想背景を考える必要はある。

6: スターリン言語学の意味

本書執筆の目的でもあったスターリン言語学の意味考察を見てみよう。田中は述べる。

「この論文は、一九二〇年代以来、ソビエトの言語学界において、いわば『国教』となっていた N. Ya. マルの言語理論を否定し、ほうむり去ることを、ほとんど唯一の目的として書かれたと言っていい」(108)。

「スターリン論文の役割は、言語学にマルクス主義を適用することが無効であり、ソビエト言語学が敗北したことを宣言することであった。ソ連の言語学に自由を与えたスターリンの役割はそこで終わ」(284) った。

スターリン論文は「『ソビエト言語学』劇に幕をおろし」た「終結宣言」で、この宣言で「ソビエト言語学は終結はしたが完結はしなかった」(285)。

田中はこう考えているのだ。「正統のマルクス主義は、言語を論ずる点では極めて単純で、とりわけ言語の多様性の問題については経験がとぼしい」(111)のだったから、言語の問題と「密接な関係にある民族理論」も持たなかったし(112)、ソ連が対応しなければならなかった民族問題について答えられなかったのだ。そこで、ソビエト固有の言語学が出て来るのだ、と。それは、マルクス主義に基づくことが出来な

かったにもかかわらずマルクス主義に基づくものだと主張し「国教」となった。スターリンはマルクス主義の敗北を宣言したのである。

これは田中の「ソビエト言語学」なる語の用法に注目すれば更に明らかになる。そもそも彼の用法は厳密さに欠けていた。

1: 2-3 頁では、ソビエト言語学とは「スターリンが一つ一つ項目をかかげながら否定しているもの」だとする。ならば、スターリン言語学がマルクス主義言語学なら、ソビエト言語学はマルクス主義言語学ではない。スターリン言語学がマルクス主義言語学でないのならソビエト言語学はマルクス主義言語学となり得る。

2: 111-112 頁では、「マルクス主義から出発しながら、ある点では、マルクス主義の教義に反した、極めて非マルクス主義的な地点に到達してしまった。そのような言語学を、マルクス主義的言語学から区別されるべき『ソビエト言語学』として、固有の内容をもったものとして位置づけてみる必要がある」とする。これは明快である。ソビエト言語学はマルクス主義言語学ではない。

3: 一方、284 頁では「スターリン論文の役割は、言語学にマルクス主義を適用することが無効であり、ソビエト言語学が敗北したことを宣言することであった」とする。ソビエト言語学とはマルクス主義言語学ということになる。同時に、スターリン言語学はマルクス主義言語学ではない。

第2項と第3項は矛盾する。「ソビエト言語学」とは何だったのか？

名称上の「ソビエト言語学」と実質の「ソビエト言語学」があるとなれば、矛盾は解決する。そしてそれがスターリン論文の意味であった。

ソ連固有の課題を解決する能力がないマルクス主義には実際には基づかず、しかし基づくと詐称していたのが「ソビエト言語学」であった。スターリン論文はその詐称を再びマルクス主義の名で暴いた。だがマルクス主義は力を持たず、解決しなければならない課題は残っている。それを扱う言語学が必要であった。そしてそれは「ソビエト言語学」に他ならない。実質の「ソビエト言語学」は残るのである。

逆説的な言い方をすれば、スターリン言語学とは、彼が否定した「ソビエト言語学」であった。「終結はしたが完結はしなかった」のも当然である。問題は残り続けたのであるから。

また、スターリンの「この論文は、言語についての思想史の上で、どのような意味をもっていたか」(105)を考える田中は本論文を以下のように評している。

「スターリン論文は、言語は文化ではないという、まさにこのことを言うために書かれたとさえ言ってもいいくらいである」(287)。

「この論文を読みなおして考えてみさせられることは、人間と社会にとって、言語の持つ意味は、歴史の中で、いつも同じではないということである」(289)。

「ソビエト言語学は[……]重大な事実気がついた。それは、言語的意味の外被をなす、呪術的、宗教的、イデオロギー的要素が刻々と失われ、中核をなす技術的意味がますます重きをなして行くという事実である。マル派のアバエフが[……]『言語は物質文化に近づきつつある』と鋭く指摘したのは、一九三四年のことであった。一九五〇年のスターリン論文はそのことを確認し、言語を上部構造(文化)からはずすことによって、一つのイデオロギーに終えんを告げた歴史的記念碑であった」(289-300)。

「言語は文化ではない」と考えた人がいて、それを受け入れた時代があった。だが、田中も我々も「言語が、いかに強力に、イデオロギーの磁場の中に置かれているか」(147)を知っている。だが、単純に言語と文化を結びつけて良いのか？ 現代にとって言語の持つ意味とは何か？ 「言語は文化」と「文化」を錦の御旗とし、スターリン論文を嘲笑して「歴史的記念碑」として葬り去ることが出来るのか？ 我々は「言語と文化」を考える。現在、この名の学部・大学紀要が何と多いことか。この状況の中で、真に「言語と文化」を考えるならば、スターリン論文とそれに対する人々の反応を無視することは出来ないはずである。スターリン論文は、「言語＝文化」観の単純な人々に「言語＝道具」という一撃を加える力を持つ。殴られて痛むかどうかは別の問題であるが、殴られるのは無駄ではない。

7: 補足

スターリン論文が発表された背景について、田中が最後に指摘しているのは、サイバネティックスへの「需要と期待」である(285)。この指摘は正しい。サイバネティックスの衝撃、そして、構造主義の流入、ヤコブソンの一時帰国、モスクワ・タルトゥ記号学派の成立といったものを思えば、こうしたものは人文科学の他領域にも見られるものであった¹。こうした文脈でロシア言語学史を考えることは必要であるが、本書が扱う範囲を超えるものではある。

田中のもう一つのテーマは、言語学の自立性の問題である。有り体に言えば、彼は懐疑を持っている。言語を「歴史と社会の、あらゆる文脈からきりはなされた自律の体系」(110)とみなす言語学もあり得るが、「民族の問題の大部分は言語の問題で」(10)、「『言語』についての定義そのものが極めてイデオロギー的」(109)であって、「『言語の多様性』と、それぞれの言語の異なる構造——すなわち価値——の意義を認める」(111)なら、それだけでは済まない。スターリン論文を取り上げることで田中は、言語把握の単純化、一貫はしているが閉じている言語学を批判するかのようである(但し、構造が直ちに価値なのか? 多用な構造それぞれに価値があるということか)。

8: 最後に

田中は自ら設けた主問には答えている。スターリン言語学の意味も述べ、ソビエト・イデオロギーというものも語られている。他ならぬ1950年に発表されなければならなかった理由は必ずしも明らかにされていないし、当時の言語政策・国際政治関係と紙上討論との繋がりやスターリンの著者性・チョコバヴァとの関係、諸外国での反応など全ての問題が完璧に説き尽くされているとは言えないが、現代文庫版の記述としてはこれで良からう。

だが、何故今スターリンを扱うのか、という問題が依然として残る。

¹ Ср.: Егоров Б.Ф. Жизнь и творчество Ю.М. Лотмана.—М., 1999. 本書は、モスクワ・タルトゥ記号学派の創始者で重鎮であったロートマンの伝記で、この学派がどのように成立したかが生き生きと描かれている。

執筆の目的を「悪夢の如く忘却されたスターリンの言語・民族理論を [……] ドグマから解放し」て「現代の民族紛争の本質を探るため」¹ 再評価するということとすれば、それはある程度成功しているように思われる。しかし、スターリン論文が民族問題の根にあるのか、スターリン論文は民族問題の流れに一時咲いた徒花であったのか、スターリン論文はただのエピゴーネンではなかったのか、などは本書では明らかにされていない。また執筆の動機にしても、再評価に意義があるから田中は執筆したのか、それとも自らの来し方にけりをつけるためにスターリンに取り組んだのか、単に勧められたからか、今ひとつ明らかではない。

現在再評価に値するとすれば、スターリン言語学のアクチュアリティを論じなければなるまい。終焉はしたが完結はしなかったと見るならなおのことである。スターリン論文が歴史的記念碑としても、それではエピソードに過ぎず、葬り去ることも出来る。読む人が読めば分かるのかもしれないが、具体例をあげるなどして、スターリンの意義が現代にどう生きているかというものを示して欲しかった。類書がないだけに示す方が良かったと思われる²。

構成・記述上、重要なテーマが余談風に挿入されていることは問題である。そのため、同じテーマにまとめられるはずのものが複数の異なる場所に書かれている。書きとばし、執筆中に浮かんだ関連事項をそのまま書いてしまったという印象だ。これに連関して言及された文献もバラバラである。書誌もない。但し、こういった書き方が、ある種の談話・講談風の雰囲気、もしくは、スピード感を与えている（例えば、ローザ・ルクセンブルクへの感慨、時枝とのエピソードは本論とはそうは関係ないが、あって良かったものである）。

田中自身が既に自著の併読を勧めている。確かに本書だけでは、田中のこだわりは伝わらないかも知れない。又、本書の中のエピソード

¹ 本書カバー表1側袖。

² 例えば、ナショナリズムとの関係はないのか。評者は、アンダーソンの『想像の共同体』を想起するのだが、他、当然、同時期のルイセンコ学説との相似が問題になり得よう。

の中には既述と重複するものもある(ポリワノフに関する回想など)。

田中の言説を全て無視して単なる資料あるいは翻訳書とだけみても本書の価値はあるはずであった。だが、誤植の存在が価値を下げている。

ロシアでの研究が言及されているものの「緊張感と魅力」(255)が無いように捉えられて、利用されていないことも問題である。確かに、スターリンへの反応に関しては、時代を共有しなかった現代のロシア人よりも同時代の日本人の記述の方が示すところが多いというのは納得できる。だが、スターリン後のソ連も言語・民族について考察し政策を採用実行していたのだし、日本とも関係が途切れていたわけではなかった。影響関係はあったはずである。スターリン論文でソ連の記述を終わりとするのは誤りである¹。

以上を考えると、スターリン論文から言語学に入った田中にとって本書ではスターリンへの取り組みの決着はついていない。「これを最後」などとは言わず、訳文を正し、構成を整え、記述を尽くした増補改訂版を出すべきだと考える。それでなければ「精読」の名に値しない。

¹個人的には、アルパートフの『ある神話の歴史』(書誌参照)などは時代・社会・政治と学問の関係を考えさせる好著で翻訳に値すると思う。

書誌

スターリン言語学論文の邦訳及び日本語二次文献、外国語二次文献、原文を掲載した著作集の書誌を掲げる。勿論、これが全てと主張するものではない。なお、

I：邦訳は、早稲田大学図書館で調査したもの。

II：日本語二次文献は、田中が紹介したものと筆者による追加。田中自身のもものは割愛した。

III：外国語二次文献も然り。

IV：原文掲載の著作集も然り。

である。

I：スターリン言語学論文 邦訳書誌

#『前衛』（日本共産党中央機関誌）1950〔昭和25〕年51号。

イ・スターリン 『言語学におけるマルクス主義について』 70—85頁。

イ・スターリン 『言語学の若干の問題について —同志クラシエニンニコワへの回答—』 85—89頁。

#イ・スターリン 『「言語学におけるマルクス主義について」および右論文への質問に対する回答』 言語問題研究会、1950〔昭和25〕年？、54頁。謄写版

まえがき 1—2頁。

一、言語学におけるマルクス主義について 3—33頁。

二、言語学の若干の問題について —同志クラシエニンニコワへ—〔ママ〕 34—41頁。

三、同志ア・ホロポフへの回答 42—49頁。

四、同志サンセエエフ〔ママ〕への回答 50—51頁。

五、同志デ・ベルキンおよびエス・フレルへの回答 52—54頁。

#イ・ヴェ・スターリン 『言語学におけるマルクス主義』 日本共

産党宣傳教育部編 日本共産黨出版局、1950〔昭和25〕年9月5日、57頁。〔「ついで」なし〕

まえがき 1950年8月

言語学におけるマルクス主義について 1—34頁。

言語学の若干の問題について〔同志クラシェニンニコワへの回答〕 35—44頁。

同志たちへの回答

- 1 同志サンジェーエフへの回答 45—46頁。
- 2 同志デ・ベルキンおよびエス・フレルへの回答 47—49頁、
- 3 同志ア・ホローポフへの回答 50—57頁。

除村吉太郎編 『スターリン 作家への手紙』 「附録 言語学におけるマルクス主義について 日本国民にたいする新年のメッセージ」、ハト書房、1952〔昭和27〕年2月10日、181頁。〔奥付は『スターリンの作家への手紙』〕

目次

作家への手紙

デミヤン・ベードヌイへの手紙

ビリ＝ベロツェルコフスキーへの返事

フェニクス・コーンへの手紙

ア・エム・ゴーリキーへの手紙

ベズィメンスキーへの手紙

スターリンとソヴェト文學（ア・エム・エゴーリン）

附録

I 言語学に於けるマルクス主義について 99—157頁。

言語学の若干の問題によせて

同志たちへの回答

〔「言語学に於けるマルクス主義について 1950年6月20日 「プラウダ」紙〕 翻訳担当者 吉原武安・佐々木彰・和知久夫 99—134頁。

「同志イエ・クラシェニンニコヴァへの回答 6月29日」 翻訳担当者 清水邦生 135—143頁。

「同志たちへの回答」 翻訳担当者 和知久夫、144—157頁。

「同志サンジェーエフへ」 144—145 頁。

「同志デ・ベールキンおよびエス・フウレールへ」 145—148 頁。

「同志ア・ホローポフへ」 149—157 頁。]

II 文化問題発言集

III 日本國民へのメッセージ

あとがき

コンスタンチノフ・アレクサンドロフ監修 『スターリンの労作『マルクス主義と言語学の諸問題』における弁証法的唯物論と史的唯物論』ソヴェト研究者協会訳、大月書店、1952〔昭和27〕年、609 頁。

付録

「マルクス主義と言語学の諸問題について（イ・ヴェ・スターリン）」
565—609 頁。

一 言語学におけるマルクス主義について 565—591 頁。

二 言語学の若干の問題によせて 592—598 頁。

三 同志たちへの回答 599—609 頁。

トロシン・デ・エム 『自然科学とスターリン言語学』 岩崎書店（知識文庫刊行会「知識文庫」7）、1953〔昭和28〕年、114 頁+12 頁：60—114 頁所収。

「マルクス主義と言語学の諸問題」

一 言語学におけるマルクス主義について 60—92 頁。

二 言語学の若干の問題について 93—101 頁。

三 同志への回答 102—114 頁。

スターリン 「マルクス主義と言語学の諸問題」 スターリン 『弁証法的唯物論と史的唯物論他二篇』 石堂清倫訳 国民文庫社(国民文庫205)、1953〔昭和28〕年(初版)、1955〔昭和30〕年第10版、209 頁+12 頁：141—198 頁所収。

『スターリン戦後著作集』 大月書店、1954〔昭和29〕年。(『全集』補遺別巻) 筆者未見→岩波現代文庫版底本。

Ⅱ：スターリン言語学論文 日本語二次文献書誌

森下眞佐子 「問題の新文献Ⅰ 言語学におけるマルクス主義 —スターリンの二つの論文—」 『理論』(理論社) 第14号(1950〔昭和25〕年9月)：75—84頁。

時枝誠記 「スターリン「言語学におけるマルクス主義」に関して」 『中央公論』 1950〔昭和25〕年第15号：97—104頁。

『時枝誠記博士論文集第三冊 言語生活論』 岩波書店、1976〔昭和51〕年：219—231頁所収。

村山七郎 「ソヴィエト言語学とスターリンの批判」 『思想』(岩波書店) 1950〔昭和25〕年11月号：57—66頁。

小林英夫 「スターリンの言語観」 『文學』(岩波書店) 第19巻第2号(1951〔昭和26〕年2月)：22—29頁。

蔵原惟人 「今日における言語の問題」 『文學』(岩波書店) 第19巻第2号(1951〔昭和26〕年2月)：43—52頁。

寺澤恒信 「スターリンの言語論をめぐって」 『文學』(岩波書店) 第19巻第2号(1951〔昭和26〕年2月)：57—59頁。

大島義夫 「ソヴェート言語学論争」 『文學』(岩波書店) 第19巻第2号(1951〔昭和26〕年2月)：59—64頁。

三浦つとむ 「なぜ表現論が確立しないか」 『文學』(岩波書店) 第19巻第2号(1951〔昭和26〕年2月)：65—77頁。

『三浦つとむ選集 1 スターリン批判の時代』 勁草書房、1983〔昭和58〕年：50—68頁所収。

水野清 「ヴィノグラードフ 「言語学論争と言語学の問題について

のスターリンの労作」 『文學』(岩波書店) 第19巻第2号(1951〔昭和26〕年2月):78—83頁。

東郷正延 「スターリンと世界語の問題」 『東京外国語大学論集』 第1号(1951〔昭和26〕年):95—98頁。

タカクラ・テル 「言語もんだいの本質 言語学とニッポン語のもんだいについてクラハラ・コレンドくんに答える」 『理論』(理論社) 第16号(1951〔昭和26〕年?月):1—26頁。

民主主義科学者協会言語科学部会監修 『言語問題と民族問題』 『季刊理論』 別冊第2集(1952〔昭和27〕年12月)。[筆者未確認]

コンスタンチーノフ・アレクサンドロフ監修 『スターリンの労作『マルクス主義と言語学の諸問題』における弁証法的唯物論と史的唯物論』 ソヴェト研究者協会訳、大月書店、1952〔昭和27〕年、609頁。

ドイツ統一社会党中央委員会編 『唯物史観の諸問題』 相原文夫訳 三一書房、1954〔昭和29〕年、316頁。

石田英一郎 「唯物史観と文化人類学 一とくに文化の構造と人間性の問題をめぐって一」 『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所) 第9冊(1956〔昭和31〕年3月):1—22頁。

村山七郎 「ソヴェト言語学の日本のインテリ」 『民俗と歴史 民間傳承』 第234号(1958〔昭和33〕年7月):27—29頁。

村山七郎 「スターリンと言語学」 『共産圏問題』(欧ア協会) 第6巻第4号(1962〔昭和37〕年4月):25—41頁。

藤沼貴 「ソヴェト言語学の動向 一ロシア語研究・教授の前提として一」 『早稲田大学語学教育研究室紀要』 第1号(1962〔昭和37〕

年9月) : 23—39頁。

佐藤純一 「言語の進化と革命」 『言語』(大修館書店) 第1巻第6号(1971〔昭和46〕年) : 19—26頁。

イヴィッチ・ミルカ 『言語学の流れ』 早田輝洋・井上史雄共訳、1974〔昭和49〕年(第3刷1987〔昭和62〕年) : 72—76頁。

佐藤純一 「ポリワノフ(リレー連載=大言語学者たち11)」 『言語』(大修館書店) 第5巻第2号(1976〔昭和51〕年) : 98—108頁。

三浦つとむ 『三浦つとむ選集1 スターリン批判の時代』 勁草書房、1983〔昭和58〕年 : 29—89頁。

「時枝理論への民科の言語学者の攻撃」

三枝博音「スターリン言語観の日本における一解釈 —ノアレの理論に関連して—」

時枝言語学の功績

スターリンの言語学論文をめぐって

シンポジウム報告要旨 スターリンの見解と私の見解とはどこがちがうか

なぜ表現論が確立しないか

スターリンは如何に誤っていたか

佐藤純一 「ソ連言語学界のグラスノスチ——言語学者スターリンの真相など」 『言語』(大修館書店) 第17巻第10号(1988〔昭和63〕年10月号) : 18—23頁。

Ⅲ : 外国語二次文献書誌

Горбаневский М.В. В начале было слово...: Малоизвестные страницы истории советской лингвистики. — М.: Изд-во Университета дружбы народов, 1991. — 256 с.

Алпатов В.М. История одного мифа: Марр и марризм. — М.: Наука. Главная редакция восточной литературы, 1991.— 240 с.

Rubenstein H. The Recent Conflict in Soviet Linguistics, *Language*, 27, No.3(1951), pp. 281—287. [筆者未見]

Thomas L.L. The Linguistic Theories of N.J. Marr.—Berkeley and Los Angeles, 1957. [筆者未見]

IV : 原文掲載著作集

Stalin I.V. Works. — V. 3 [XVI] 1946—1953./ Ed. by R.H. McNeal.— Stanford, California: The Hoover Institution of War, Revolution, and Peace Stanford University, 1967.

Марксизм и вопросы языкознания.—С. 114—148.

К некоторым вопросам языкознания.—С. 149—157.

Ответ товарищам.—С. 158—171.

[本テーマのもとに編年体の原則を破って一連の論文を纏めた旨、編者の注あり]

Сталин И.В. Марксизм и вопросы языкознания.—М., 1950, 1951, 1952, 1953. [筆者未見]

(こばやし きよし)